平成２８年度第２回芦屋市地域福祉推進協議会議事録

日　　時	平成29年3月21日(火)　14:00 ～ 16:10
会　　場	市役所東館3階 大会議室
出　席　者	会　　長　牧里　毎治 副 会 長　杉江　東彦 委　　員　長澤　豊，山下　訓，仁科　睦美，稲岡　由美子，加納　多惠子， 岡本　直子，段谷　泰孝，福本　敏之，神田　信治，堺　孰， 仁木　義尚，森川　太一郎，西浦　哲雄，北野　章，津賀　学， 寺本　慎児 欠　　席　佐野　武，高橋　裕文，山田　弥生 事 務 局　社会福祉協議会　園田　伊都子，宮平　太，三芳　学， 今井　晃子 福祉部地域福祉課　細井　洋海，頭井　智世，浅野　理恵子， 吉川　里香，片岡　睦美 関 係 課　こども・健康部子育て推進課　茶嶋　奈美 福祉部社会福祉課　廣瀬　香 福祉部福祉センター　岡田　きよみ 福祉部生活援護課　中西　勉 福祉部障害福祉課　本間　慶一 福祉部高齢介護課　井村　元泰
会議の公表	■　公　開　　□　非公開　　□　部分公開
傍 聴 者 数	1人

１　議題

（１）平成２８年度の取組について

（２）抽出された課題の解決に向けた取組について

２　資料

事前資料

事前資料１　平成２８年度小地域福祉ブロック会議　進捗状況

事前資料２　平成２８年度中学校区福祉ネットワーク会議，
地域ケアシステム検討委員会　進捗状況

事前資料３　芦屋市地域発信型ネットワーク　平成２８年度の取り組みまとめ（案）

事前資料４　生活物品等ゆずりあいネットワークについて

事前資料５　地域アセスメントの実施について

当日資料

次第

芦屋市地域福祉推進協議会設置要綱

芦屋市地域福祉推進協議会委員名簿

芦屋市地域福祉推進協議会委員以外名簿

当日資料１　〔仮称〕認知症当事者の思いを知るキャンペーン（案）

当日資料２　○○地域白書（見本）

当日資料３　地域発信型ネットワークにおける芦屋市附属機関等の位置づけと意義について

３　審議経過

（牧里会長）

地域福祉は，社会福祉法の制定により，各自治体が取り組むことになりました。地域福祉の原点としてはイギリスのセツルメント活動であったり，地域での助け合い，相互扶助であったり様々な考え方がありますが，基本的に市民が取り組んできたことは二つあります。

一つ目は相互扶助です。相互扶助の特徴は，メンバーが確定していないと起こらないという点です。

二つ目は見返りを求めない奉仕的な活動です。例えば，地域から追い出されてしまった方々を助ける篤志家やボランティアのような，困った人がいたら支援をしようという活動です。

地域の力が弱くなっていることや，社会の仕組みや考え方の変化からこの二つの福祉活動が弱くなってきています。しかし，全てなくなったわけではなく，大事なものは残っていますし，残していかなければならないものもあります。

地域福祉は行政だけでできるものではありません。行政が地域とともに取り組む仕組みをつくっていかなければならない時代に入ってきました。社会保障等も整備されてきましたが，それだけでは問題がカバーできないと気づき始めたことから地域福祉が脚光を浴びるようになったと考えています。

このような歴史の中の一コマをこの会議が担っているのだと思っていただければありがたいです。挨拶に代えさせていただきます。

（杉江副会長）

ここに座らせていただくのは２回目でございます。私は芦屋市民ですので，皆さんお忙しい中，集まって真剣に考えられている会議がすばらしいと思います。ただ，この会議のような芦屋をより良くしようという取組が市民に見えづらいのがとても残念です。

本日もどうぞよろしくお願いいたします。

（牧里会長）

それでは，本日の議題に従って会議を進めてまいりたいと思います。

まず，本日は平成２８年度の取組について，振り返りを行います。事務局から基本的な説明をいただき，皆さんからご意見，ご質問をいただきたいと思います。

（事務局　宮平）

芦屋市地域発信型ネットワークの説明及び小学校区福祉ネットワーク会議の進捗状況について報告

（事務局　三芳）

生活物品等ゆずりあいネットワークについて報告

（牧里会長）

先日，中学校区の福祉ネットワーク会議に初めて参加いたしました。先ほど事務局から説明のあった生活物品等ゆずりあいネットワークについて，中学校区に広げてはどうかという話や，認知症の人たちに対する支援の話題が中心だったかと思います。皆さん熱心に話されており，芦屋市らしい印象を持ちました。

“ゆずりあい”というのは日本独特のものです。ワンガリ・マータイさんの話で広まった“もったいない”という言葉が有名ですが，彼女は他にもう一つ話したことがあります。環境に優しいというのは，リユースやリデュース，リサイクルのほかに“リスペクト”という物を大切に尊重するという気持ちが日本人の中にあるのではないかという話です。この話で

日本の社会はお金で動いている部分が多く，たくさんの物であふれ，大切にできていないのではないかということを思い出しました。私たちの暮らしはお金で動く部分と動かない部分のどちらも大切にしなければ良い社会にならないというメッセージだったのではないかということに大変喜びを感じました。

私が先に申し上げましたが，このような感想でもかまいませんし，地域発信型ネットワークをご覧になって，感じたこと，疑問に思ったことがありましたら，ぜひおっしゃってください。

（堺委員）

私は震災の直後，神戸大学の学生と「まごのて」を立ち上げました。とても良いことだと思ったのですが，学生はそれぞれ進路の関係で中断してしまい，惜しいと思っています。生活物品等ゆずりあいネットワークは市や社会福祉協議会を通じて大学との連携を行ってはどうでしょうか。物の移動や整理，修繕等でちょっと行き届かない仕事を学生の方と取り組む仕掛けを作るこの事業は面白いのではないかと思います。

（牧里会長）

地域福祉活動は地域を基盤に行いますが，地域の中だけで担い手や活動する人を集めようとすると限界があるので，市外にも範囲を広げ，学生にも手伝ってもらってはどうかという提案をいただきました。芦屋市を地域福祉活動に関心のある方のフィールドワークの場として提供し，大学生であれば，最大４年間しかありませんが，短い期間でも地域福祉活動を経験し，また，学生が故郷に帰った先でまた地域福祉活動を行うような仕組みですね。例えば私がいる関西学院大学と芦屋市が提携し，学生がボランティア活動の機会がぜひあれば良いと思いました。

（加納委員）

熊本地震ボランティアにいったとき，芦屋大学の学生にも参加していただきました。ボランティア後の座談会では，体験を通じた素晴らしいお話を伺いました。あの気持ちをどこかにつなぎたいと思うと，社会福祉協議会のボランティアセンターを利用していただいて，青少年にスポットを当てた活躍の場やボランティア，福祉学習等につながるような活動を考えていきたいと思っております。

（牧里会長）

心強いご発言をいただきました。

（仁木委員）

高齢化社会もあり，そろそろ終活を考えておられる方が多いと思いますが，自分で片づけて物を捨てるというのはとても大変で時間のかかる作業です。寄附を待つだけでなく，こういった終活のお手伝いや認知症の方の家の整理に出向くことで不用品も多く集まるのではないかと思います。行政は待ちの姿勢が多いですが，こちらから出向かなければ物事もうまくいかないと考えています。

また，芦屋市の特徴として小学校から中学校へ進学するときに６割の子どもが市外の中学校に進学しています。子どもが市外に出たことで，親が関わる人は市外の方が中心となり，近所づきあいが希薄になるので，近所づきあいについても考えなければならないと思います。

（牧里会長）

寄附を待つのではなく，積極的に出向いたほうが良いのではないかというご提案でしたが，皆さんいかがでしょうか。

（神田委員）

私はケアマネジャーをしております。このネットワークに関連すると，一人暮らしの方が亡くなったり，入院したり，施設入所されたりすると家を片づけることになりますが，その

ような際はとても多くの不用品が出てきます。しかし，売ってもお金にならず，処理代がかかるだけでもったいないと感じています。

このネットワークはぜひケアマネジャーに発信していただき，我々も活動していきたいと思った次第です。

（牧里会長）

先日，個人的に東京の池袋にある「子どもwakuwakuネットワーク」を見学しました。子ども食堂が流行っていますが，見学に行ったこども食堂ではお寺が厩を提供し，地域のお母さん方がご飯を作っていました。子どもたちとシングルマザーが来ていましたが，夜の児童館のようで，そこに東京工大の学生がサイエンスカフェも行っており，様々な世代が役割を果たしていました。その中に生活物品等ゆずりあいネットワークに近いものがありました。例えば，インターネットで足りないものを募ると，予想以上の数が届くそうで，関心を持っている人がいかに多いかということを実感しました。

何かを始める際には失敗したらどうするか，人が来なかったらどうなのかということが気になります。池袋のこども食堂も始めた当初は２，３人しか参加されていなかったそうですが，私が見学したときは７０人を超える人が集まっていました。広がることで，食材についても寄附が来るようになったり，大学生に手伝ってもらったり，様々な世代が役割を持ってつながることがわかりました。昔は普通にしていたことですが，今は目的をもって取り組まないとなかなかみんなが参加しないということもありますので，このネットワークが発展していくことで多くの可能性を持っていると感じました。

他にご意見やご感想はございませんか。なければ次の議題へ移ります。

（事務局　宮平）

抽出された課題の解決に向けての取組について報告

（牧里会長）

二つの大きな柱がありました。認知症の方の思いを知るということと地域アセスメントを行い，地域白書を作るということでした。地域の実情を問題だけ捉えるのではなく，どのような可能性があるか資源や地域の力を見つける事業を行いたいということでした。どちらからでもかまいませんので，ご意見やご感想，ご質問いただきたいと思います。

（仁木委員）

当事者の思いを知るための取組とおっしゃいましたが，例えば災害や犯罪があった際に新聞記者やテレビの記者が当事者に取材し，「今の気持ちはどうですか」と質問している場面をよく見ます。当時者がどのような気持ちでいるかということよりも本来聞かなければならないのは「新聞やテレビを通じて何かできることはありませんか」ということだと思っています。単純に今の気持ちを教えてくださいと聞くのではなく，具体的に何をしてほしいのか，何があれば助かるのか質問の仕方を工夫する必要があると思います。

地域アセスメントについては，モデル地区で行うとのことですが，それぞれの地区によってカラーがあると思います。そのため，例えば浜風地区の様子を見て，市内すべてが同じだとは判断できません。市内全域に広げるためには，ビジョンを持つことの意味について聞かれた方がいいかと思います。

（牧里会長）

認知症の方や家族の方に思いを聞くと言っても，身内が認知症であることを知られたくないという方は多くいらっしゃいます。このような中で，本当に必要な内容を聞けるのかということや聞き方や内容について精査する必要があるのではないかというご意見でした。長澤委員は日頃接しておられる中でお気づきの点はありますか。

（長澤委員）
私も先ほどのお話と同じ思いです。まず，認知症当事者の対象者はどのように選ぶのかという点です。認知症と言っても様々な段階がありますので，どの段階の方を選ぶのかで変わってくると思います。また生活環境によっても変わるため，対象の方を選ぶことはとても難しいのはないかと思います。
また，先ほど仁木委員の話でもありましたが，認知症の方に何か困っていることはありませんかと聞いても，困っていることだらけと答える方が多いと思いますので，どのようなことを期待して，何にいかすために行うのかはっきりさせる必要があると思いました。
認知症の方が何に困っていて，どのような生活を送っておられるのかを知り，反映していくという点では行っていく価値は非常にあると思います。
（牧里会長）
加納委員何かご意見ありますか。
（加納委員）
高齢者のつどいを行っていると，認知症と言われることが一番嫌だとおっしゃいます。地域の方や身近な方に「あなたちょっと認知症の症状が出ているでしょう」と言われると閉じこもってしまうとお話をされていました。
高齢者の方のお気持ちとしては，認知症と言われたくないから日々心配と戦っているという状態です。その不安な気持ちを，地域の方に温かく見守られながら暮らしていくことができるというところに結びつけられるインタビューやアンケートであればいいと思います。
先ほど皆さんの話の中でもありましたが，どのような質問を行い，どのように活用するのかはっきりさせる必要があると思います。認知症と言われることを皆さん心配されている中で，インタビューを受けたことでショックを受けられることがないよう，配慮し，取り組んでいただきたいと思います。
（牧里会長）
神田委員にお伺いします。
日頃，認知症の方やご家族と接する機会が多いと思いますが，このようなアンケートを行う際に注意点ありましたらお願いいたします。
（神田委員）
加納委員のお話に同意します。医師が診断し，ご本人に説明するということは大変重要視されているところではありますが，本人への告知は配慮された中で行われており，認知症の問題はとてもデリケートであると感じています。
そのため，インタビューには当事者の方にご配慮いただけるような形で行っていただけたらと思う一方で，当事者の方は自ら発信することも全国的には広がっているように感じます。
市内でも積極的な方がいらっしゃるかと思うので，企画を練って取り組んでいただけたらと思います。
（牧里会長）
認知症であることを家族や近所の方に知られたくないという方が多くいらっしゃるということですね。今までしっかりしていた人が家から出ると周りから冷たい目で見られてしまうのではないかという不安や変わってしまった自分に対しての苛立ちのようなものがあると思います。このような背景から関わり方によっては，密室化が進んでしまうということが課題であると思います。日頃から風通しの良い，認知症の方もその家族の方も気軽に外に出ることができる場所があるということが大切です。同様の課題を感じている人がいて，孤立感，孤独感を和らげるような取組と並行して行った方が良いのではないかという皆様からの提案でした。インタビューを行い，お話してくださった方にこちらから何か提案できなければ，

つらい思いを倍増してしまうということを心配されているのだと思います。例えばボランティアで買い物や荷物運びで若者を手伝ってもらうなど，日頃の活動があって初めて「実は，おばあちゃん，最近物忘れが多くて」という相談があり，医療機関につながるというケースもあるのではないかと思います。何か事務局で議論されていますか。

（事務局　宮平）

内容や対象者についてはこれからプロジェクトメンバーを集め，議論をしていく必要があると思っています。

（加納委員）

例えば「認知症予防」という言葉ではなく，「介護予防」や「生きがい」という言葉を使えば人は多く集まるのではないかと思います。地域の中で気になる高齢者がいたとしても，「認知症」に関して声を掛けるのは難しいですが，「介護予防教室」や「生きがいデイサービス」については声も掛けやすく，参加していただけていると感じています。認知症予防の前にみんなが話しながら楽しめる居場所づくりを行い，その居場所に認知症予防の機能があれば良いのではないかと思います。

（牧里会長）

以前の会議でもご紹介しましたが，川崎市に鈴の会という活動が行われています。認知症の症状のある方の家にボランティアで行き，パーティを行うという取組です。そのパーティの中で顔見知りの方が毎週来てくれたり，たまに外に連れ出したりということは相当丁寧に行わなければ実現しないと思います。

認知症の方の思いを話していただくためには具体的な支援とセットやプロジェクトを提案した方が話していただきやすいと思います。

（段谷委員）

社会福祉協議会から提案されている二つの案件の目的や最終的にどこに活用されるのかということがあまり見えない印象がありました。

私は自治会の代表として出席していますが，一つのまちでは自治会長と老人会を兼ねております。様々な取組を行っておりますが，このネットワークについて，取組途中ということもあるかもしれませんが全く知りませんでした。自治会にも広く周知を行っていただきたいと思います。

（牧里会長）

地域アセスメントについてはいかがでしょうか。地域アセスメントは作ることに非常に労力がかかり，作っただけで終わってしまうケースが多い印象があります。

地域アセスメントは実際の地図等も必要であるほかに，協力してもらえる人等の情報も併せて掲載されているような，人と人とをつなぐ資料ができたらいいなと思います。

（杉江委員）

この取組を聞いたとき，とても面白い取組だと思いました。目的は模索中という感じでしたが，それはそれでいいのかなと感じました。

認知症については皆さんと同様の意見です。当事者の方の思いの引き出し方も大切ですが，認知症サポーター養成講座や認知症キャラバンメイト，介護相談員，認知症地域支援推進員の方々はより認知症の方の思いを知っていなければならない方々なのではないかと思いますので，プロジェクトチームに入り，知っていただけたらと思います。

（牧里会長）

面白い取組という感想をいただきました。地域白書の見本では地域紹介はとても面白いと思います。歴史や変遷については高齢者に直接話していただくのが一番わかりやすく，高齢者も若者とのつながりを持つことができ，若者は話を聞くことで，地域に愛着を持つことが

できるという面で良い取組になるのではないかと思います。
（仁木委員）
　地域白書に近いものですが，小学校の歴史を学ぶ授業で商店街を回り，人から聞いたことを絵でまとめるという取組をされています。作った後の活用方法までは知りませんが，地域アセスメントに更に情報をプラスしたものができたらいいなと思います。
　また，小学校でこのような授業が行われていても中学校で市外に出てしまう６割の子どもが市の行事から離れてしまうことで忘れ去られてしまうのはもったいないと思います。改めて各家庭に地域アセスメントしたものがあれば良い情報発信になると思います。
（事務局　三芳）
　地域ケアシステム検討委員会で学校教育課の委員からも同様の意見をいただいており，学校によってカリキュラムが異なることもあり，差が生じているという話もいただきました。
　今，皆さんからいただいた意見も基に地域の方とも地域アセスメントについて検討していきたいと思っております。
（牧里会長）
　地域アセスメントは作る過程は楽しく，協力し合いますが，活用されているところは少ないのが現状です。
　様々ある活用方法については，検討していただきたいと思いますが，せっかく作成したのであれば，それを基に新たなつながりが生まれるよう工夫していただきたいと思います。ある地域の事例をあげると，中学生が７０歳以上の高齢者に，住んでいる地区について，話していただき，最終的にクラス分をまとめた文集を作成するという取組です。話を伺ったお礼に中学生が高齢者に文集を渡し，更に高齢者は中学生に礼状を書き，その礼状を読むため，様々な方とつながりができ，以前まであいさつもしなかった人ともつながることができたという事例があります。世代間のつながりが希薄になっている時代ですので，このつながりを埋め戻すための仕組みも組み込んで取り組んでいただきたいと思います。
（事務局　細井）
　皆様からご指摘いただいた，作ることが目的ではなく，作る過程で人とつながることが大切であるということは，甲南女子大学の鈴木先生からもご助言をいただいており，作ることが目的でなく，作る中で地域の宝物を探し，整えていくことができたらとイメージしております。
　この地域アセスメントを行うことで，もう一方の認知症の方の思いをインタビューし，どのような支援があれば良いか，何を助けてほしいのかという思いを聞き，認知症の状態像別の適切なサービス提供の流れも落とし込んだ地域アセスメントができたら，認知症になっても地域で暮らし続けることができるということを目指していきたいと思っております。
（仁木委員）
　普段は歯科医として，患者と接しております。専門医としての思いを伝えますが，時には患者の気持ちと相反することもあります。客観的に見ると専門医の意見が患者にとって一番良いのですが，患者の今自分がどうしたいかという思いを汲むことも大切だと感じています。
（牧里会長）
　西宮に「つどい場さくらちゃん」という居場所があります。認知症の人とその家族の方にご飯を食べに来てもらい，そこで悩みを聞いたり，人数が多くなれば認知症の人も家族も一緒に旅行に行ったりするそうです。一度，見学に行ったことがありますが，ここでは，食事の時間等をおばあちゃんたちの時間に合わせているのでとても落ち着くそうです。そのため，ご家族の方は困ったとき，ここで過ごしているそうです。一つの参考例として見学に行くのも良いかと思います。

（山下委員）
私も歯科医ですが，高齢の患者が来られて話していると，少しおかしいなと感じる方や，明らかに支援が必要だけれども，お金がないという方がおられます。そのような方の情報はどこに伝えたら良いのかわからず，ご家族にお話するのみで終わってしまうのですが，この会議に出席して，解決方法についても知ることができたらと思った次第です。
（牧里会長）
プライバシーの問題もあり，つなぎたい気持ちがあっても何もできないまま終わってしまうということはよくあるのではないかと思います。歯医者に限らず，銀行員や店員等で気づいたときにつながることができる工夫が必要だと感じました。
（仁科委員）
認知症については「認知症サポーター養成講座」という９０分程度の講義がありますが，普通に生活しているだけでは認知症の方と接する機会は非常に少ないので，講座を受けて終わるのではなく，実際に実践として学ぶ場もできれば良いと思いました。
ご家族の方が認知症の方を認知症だと認めることができれば次のステップへ進むことができますが，実際はご家族の方も認めたくない思いもあるので，認知症サポーターがもっとうまく関わることができたらと思います。
（福本委員）
今日の話を聞いていて，認知症の話なのか，家族に対する支援の話なのかよくわからなかったというのが正直な感想です。
認知症の方については，たまに電柱に「この人知りませんか」と貼られているのを見かけます。見守りやご家族の支援ももちろんですが，行方不明になった時にすぐに見つかるような仕組みができれば良いかと思います。
地域アセスメントにつきまして，商工会としては「自己紹介スペース」を設けていただきたいという気持ちがあります。
（森川委員）
この会議で評価を行うということに違和感があります。地域発信型ネットワークの図が上下の形から左右に変更した背景にはそれぞれの会議が上下の関係ではなく，並列の関係であるということがあったからだと理解していました。そうした中で評価という言葉が上から目線な印象があります。代わりの言葉があるわけではありませんが，それぞれを客観的に捉えることができ，統一的に検討するツールという意味であると理解しております。
また認知症だけがクローズアップされているように感じますが，現代では認知症に限らず様々な課題があるかと思います。それらの取組もぜひ進めていただきたいと思っております。
（北野委員）
認知症の方に話を聞くというのは非常に難しいと考えており，実際には当事者よりも家族やサポートする人への意見聴取になるのではないかと感じています。当事者が感じていることと周囲の人が感じていることが一致していないということも課題であると感じています。
認知症サポーター養成講座につきまして，中学生で取り組むということを近隣市で行っているところもあります。中学生から認知症について学ぶことは良いと思う反面，座学で終えてしまい，その後対応が固定化されてしまう危険性もあると考えております。中学生からそれぞれの課題に向き合えるような子どもを育てる取組としては必要性を感じておりますが，慎重な方法が求められるという感想を持ちました。
（稲岡委員）
認知症に関する相談は地域によっては差があり，症状が重くても地域から声があがらない地域もあれば，問題行動があるので入院させてほしいと相談に来られる方もおられます。相

談を受ける中で，問題行動と家族の困りごと，地域の困りごとが異なっていると感じます。
皆さんの意見でもありましたが，当事者の方に聞く内容によっては，不愉快な思いをさせてしまったり，問題が焦点化されてしまったりしてしまうのではないかという不安もあります。地域見守りネットワークの事業所が１３５ほどあると報告がありましたが，その方々へのアンケートで何ができて，どう地域の役に立てるのかという生の声を聞き取り，地域アセスメントにもいかすことができたらと思います。
地域アセスメントの実施が評価の取組として記載されており，各々の会議がシステマチックに取り組めているかという評価かと思っていましたが，地域活動の評価ということでよくわからない点もいくつかありました。
（岡本委員）
まず，認知症の方の思いを知るキャンペーンですが，地域の中で顔見知りの仲でないと認知症の方とコンタクトは取りにくいのではないかと思っております。日頃から，皆さんと一緒にお食事をしながら話す中で，実はこういうことで困っているというお話が出ることもありますし，生活物品等ゆずりあいネットワークにコラボするような形で認知症の方でこれは要らないかなと思っていても本人にとっては捨てることができなくても，顔見知りの間の仲でこれが欲しいと伝え，譲ってもらうことで片づけができれば良いと思っています。
地域アセスメントについてですが，地域白書の見本などを見て，当初，小地域福祉ブロック会議があったときに，地域の資源を模造紙に書いて，その地域の特性を知るということを行った記憶があり，堂々めぐりをしているような気持ちを持ちました。次につながるような形でないと意味がないと思っております。
（仁木委員）
この協議会は，本来であれば地域ケアシステム検討委員会からあげられた課題を協議する場ですが，なかなか課題があがってこないことがありました。その結果として，それぞれの会議の評価や手法のため，今回の提案をいただいたと理解しております。
先ほどから認知症について様々なご意見ありましたが，認知症とはどういう症状があるのか，年相応の症状とは何か具体的に示してもらい，把握しなければ，普通に生活しているだけでは全くわからないと思います。
（津賀委員）
認知症の話につきまして，防災の観点から申しますと，ますます高齢化が進んでいる中，配慮の必要の方が更に増えていくと予想されており，防災安全課の方でも，災害時要配慮者の支援計画を進めております。地域のコミュニティの中でもご協力いただければと思います。
（牧里会長）
事務局で何かありますか。
（関係課　井村）
高齢介護課の井村と申します。
認知症に関して，ご意見いただきありがとうございます。この場で認知症への取組について，紹介いたします。ご意見にもありました，認知症の方をどのように医療につなげるか悩まれたときには，高齢者生活支援センターに認知症で困っている方や疑いのある方に対して適切に支援につなぐ役割を担う認知症地域支援推進委員を配置しておりますので，何かありましたら，高齢者生活支援センターにつないでいただきますようお願いいたします。
また，認知症の方の徘徊への支援につきまして，現在，高齢者の徘徊ＳＯＳネットワークの構築を検討しております。協力委員を募集し，ネットワークを構築することでできるだけ早く見つけられるように，警察とともに協議を重ねております。さらに，地域の方との生活安全推進連絡会の高齢者部会でもご意見をいただき，事務局で検討しておりますので，見通

しが立ちましたら，市民の皆様に周知できると思います。今後も何かご意見等ありましたら，よろしくお願いいたします。
（事務局　宮平）
　前回，それぞれの活動を行う中でどのような評価をしているのかというご意見をいただきましたので，市民の方の自己評価という意味も含めて，評価という表現を使わせていただきました。地域アセスメントにつきましても，市民の皆様と行っていく中で，分かりやすい表現を考えて取り組んでまいりたいと思います。
　また，モデル地区についてご意見をいただきましたが，アセスメントそのものは全地区で行う予定でございます。モデル地区ではアセスメントを行った次のステップとして考えている事例検討を行いたいと考えております。ほかの地域につきましては，モデル地域の事例検討を終えてから取り組めればと思います。翌年度４月以降のスケジュールをお渡ししておりますが，準備が整い次第，前倒しで進めることができるのではないかと考えております。
　ご意見の中に，アセスメントを行うプロセスが重要というご意見もいただきましたので，現在の小地域福祉ブロック会議のメンバーやもっと多くの方と連携し，多世代交流やつながりをつくっていかなければならないと考えております。
（寺本委員）
　先ほど高齢介護課の井村係長からも説明がありましたが，認知症の方に対する様々な仕組みは行政でも考えているところではあります。しかしながら，住んでいるところは地域であり，地域の中のどこか通える場所をより把握しているのも地域だと考えています。それぞれを支えるための支援として今回提案されたと思っております。
　地域アセスメントにつきましては，私自身も以前，阪神芦屋のバリアフリーに際して，地元の方とまち歩きを行い，このようなアセスメントシートまではいきませんが，まち歩きの結果をまとめました。関わった地域の方々からは，まち歩きをしながら，自分のまちの魅力を発見して更に好きになり，胸をはることができるという声をいただきました。その方々が後々自治会の活動や老人会の活動につながっていきましたので，まちを愛する気持ち，好きになる気持ちというのを大切にしながらこのアセスメントの取組を続けていけたらなと思いました。
（事務局　細井）
　長時間にわたりまして，熱心にご議論いただきまして誠にありがとうございました。
　この協議会は当日資料３についてご説明できませんが，内容について何かご意見等ありましたら，それぞれ所管課にご意見賜りたいと思っております。
　また，本日は今まで出てきた課題の解決策を二つ提案いたしました。新年度になりましたら，本協議会を１２月ごろ開催し，地域アセスメントや認知症の方のインタビュー等，進捗状況についてご報告する予定としております。時期が近づいてまいりましたら，開催案内を送付いたしますので，ご出席賜りますようよろしくお願いいたします。
（牧里会長）
　それでは，これで閉会したいと思います。

閉会